「バッハの信仰の源流――バッハの教会カンタータ第182番とエックハルトのドイツ語説教第2番――」

中　川　憲　次

The Origin of Bach's Belief—Bach's Church Cantata 182 and Eckart's German Sermon 2—

Kenji Nakagawa

1　バッハ

1.1　バッハの年譜より

ここでは2冊の書物（註1）の巻末の年譜に依りつつ、今回の論考に必要なバッハの前半生を瞥見してみたい。1965年3月21日にチューリンゲン地方のアイゼナッハでヨハン・セバスチャン・バッハは生まれた。10歳になる前に父母が亡くなったバッハは、オールドルフのオルガニストになっていた長兄ヨハン・クリストフ・バッハに引き取られ、音楽の手ほどきを受けると同時に、ラテン語学校にも通わせてもらっている。1700年、15歳になったバッハは、リューネブルクの聖ミカエル教会の聖歌隊員となり、経済的な独立を果たしている。1703年、18歳になったバッハは、ワイマールの宮廷に職を得、8月にはアルシュタットのボニファツィウス教会のオルガニストに就任している。1705年、休みをとったバッハは、当時の著名なオルガニストだったブクステフーデの演奏を聴くべくリューベルクに旅行し、休暇を超えて当地に滞在した。このことが問題となり、1706年には聖職会議に喚問されている。1707年6月、22歳のバッハはミュールハウゼンの聖ブラジウス教会のオルガニストに就任し、10月にはマリア・バルバラと結婚している。生業の重要さを意識していたと思われるバッハは、俸給をはじめとして、より条件の良い職場を求めて就職活動を展開して、1708年にワイマールの宮廷オルガニストに就任し、1714年にはその宮廷楽団の楽師長に昇任している。今回取り上げた教会カンタータ182番はこの時期に作曲されたものである。その後、妻マリア・バルバラの死、そしてアンア・マグダレーナとの再婚など、さまざまの状況の変転を経た後、1723年38歳のバッハはライプツィヒの聖トマス教会のカントル（音楽監督）の採用試験に合格し、その職に就いている。この職には、4週間に1曲の礼拝用のカンタータを作曲することと、聖歌隊の指導や、その他、教育的な仕事が義務として課されていた。同地でバッハは300曲近い教会カンタータを作曲したと言われている。

1.2　バッハの手紙より

バッハのカンタータ182番について考える際に役立つと思われる資料を、ここで引用したい。それは、その資料によってバッハの抱えていた苦悩の一端をうかがうことができると考えるからである。バッハがカンタータ182番を作曲したのは1715年、バッハ30歳の時であるが、その頃のバッハの心をつぶさに知ることのできるような資料には残念ながら出会えなかった。そこで、1736年、51歳のバッハがザンガーハウゼンのヨハン・フリードリヒ・クレムに宛てた手紙の一部を引用したい。そこには、不肖の息子の就職について有利な配慮を依頼している「親ばか」なるバッハの一面が顕著に浮かび上がってくるのである。1736年11月18日の手紙でバッハ曰く、

「私の心配の種でありますかの者のために閣下がそのきわめて有力なご推挙とご仲介によりすでに多大のありがたきご配慮をお示しくださいましたよし、また、しかるべき日時を定めておこなわれる試験演奏が他の競争者たちとともにかの者にも許可されることとなりましたよしうかがいまして、このうえはもはや躊躇せず、私よりご推薦申しあげましたかの者が私の息子の一人であることをお明しいたしたく存じます。本俸の件については閣下よりいまだ十分なるご報告をいただいてはおりませんが、しかし高貴にして賢明なる貴市参事会議員諸氏が閣下によって召し出された者を貧窮のうちに打ち捨てておくようなことはよもやなさるまいと、この点についてはかたがたをご信頼申しあげております。（略）それはともかく、私の手紙が最初から非常な好意をもって受け入れていただけるのをみて、この度のことにはひょっとすると神のご意志が働いているのではなかろうかという思いに誘われただけのことでございます。閣下は今後もなお私と私の家族の恵み深き恩人であり続けてくださるおかた、そして至高の神は時として返報者でもあると信じておいでのおかたです。一方この私は私の家族ともども終生変わることなき閣下のいとも恭順なる僕、ヨーハン・セバスティアン・バッハであり続けるでありましょう。」（註2）

この手紙の冒頭でバッハが「私の心配の種であります

かの者」と言っているのは、1715年にバッハとマリアとの間の三男として生まれたヨハン・ゴットフリート・ベルンハルト・バッハのことである。彼は、この手紙にあるようにバッハにとって「閣下」なる「ヨーハン・フリードリヒ・クレム」に対するバッハの懇願に助けられて、オルガニストの職に就いている。それにしても、この手紙から読み取ることのできるバッハの息子に対する愛情の深さゆえの心労は察するにあまりがある。このように偉大なる父バッハの助けによってザンガーハウゼンでオルガニストを勤めることができるようになったヨハン・ゴットフリート・ベルンハルト・バッハであったが、彼は大変な浪費家だったようで、大きな借金を抱えて1739年に24歳の若さで亡くなることになる。そのような息子の不始末について、これまたＪ・Ｆ・クレムに宛ててバッハの書いた手紙が残っている。こうである。

「私儀不在のためご尊筆に対していまもってご返事できずにおりますことを、なにとぞ悪しからずご容赦くださいますよう。なにぶんにも私は二日前にドレースデンよりもどってまいったばかりなのでございます。ところで私がどれほどの苦しみをもってこのご返事をしたためおりますことか、最愛のお子様がたの情愛深く心やさしい父であられる閣下ならば、おのずからおわかりいただけるものと存じます。私が閣下よりかずかずのご好意をたまわるという名誉に浴しました昨年以来、息子（遺憾ながら出来損ないの）には一目も会っておりません。閣下もご存じのはずでありますが、あのとき私は息子のために食事代ばかりかミュールハウゼンでの手形（これがおそらく息子の出て行った理由なのでありましょうが）まできれいに片をつけてやりました。そのうえさらに、今度こそは生活態度を少しでも改めてくれるものと期待しつつ、いくつかの負債の返済に当てるようにと数ドゥカーテンの金を置いてまいったのでした。ところがあの子はまたしてもあちこちで借金を重ね、生活態度を少しも改めないのみか、行方までくらまし、しかもきょうにいたるまで居所の居の字さえ知らせてこないしまつです。またしてもこうかと思うと、まったく途方に暮れるばかりです。私はこれ以上何を言い、何をしたらよいのでありましょうか？どんな訓戒も、いやどんな優しい思いやりや援助も、もはやなんの効き目もなくなってしまった今となっては、私にできますことは、わが十字架を負う苦しみに耐え、出来損ないのわが息子をば、ただただ神の慈悲にゆだねまいらせるほかはなく、そうすれば必ずや、慈悲深い神は私の悲しい願いをお聞き届けになり、そしてついにはその聖なるご意思によりわが息子を導きたまい、悔悛はただひとえに神の慈愛のたまものであることをあの子にも悟らせてくださるでありましょう。」（３）

ここまでの引用でも、バッハの三男ヨハン・ゴットフリート・ベルンハルト・バッハの劣悪な生活態度は十分うかがえる。それと共に、この引用の最後の部分にある言葉、すなわち「私にできますことは、わが十字架を負う苦しみに耐え、出来損ないのわが息子をば、ただただ神の慈悲にゆだねまいらせるほかはなく、そうすれば必ずや、慈悲深い神は私の悲しい願いをお聞き届けになり、そしてついにはその聖なるご意思によりわが息子を導きたまい、悔悛はただひとえに神の慈愛のたまものであることをあの子にも悟らせてくださるでありましょう」という言葉に、バッハの信仰がよく示されていると思われる。バッハは「出来損ないの息子」を見捨てることができないという、人の子としての当然の葛藤の極みで「慈悲深い神」に本気で縋り付いているのである。

さて、この後を少し飛ばした上で、なお同じ手紙の引用を続けたい。

「あの子の就任のためにその後ろ盾となってくださった閣下にはここであらためて厚くお礼を申し述べますとともに、あの子の現在の居所（昨年来私が息子に会っていないことは、全知の神が証人でございます）をつきとめ、あれがこの先どうするつもりなのか、つまり、いまの地位にとどまって行状を改めるのか、それとも自分の運命をどこか他に求めようというのか、この点を問いただしますまでは、息子の身に迫った更迭を延期するよう貴参事会に働きかけてくださるものと信じて疑いません。わが息子の事で貴参事会にご迷惑をおかけするのは、もとよりわが本意ではありませんが、しかし息子がふたたび姿をあらわすか、あるいはその居所なりと判明するまでは、いましばらくのご辛抱をお願いいたしたいのでございます。（略）できるだけ早くご返事がいただけますことを期待しつつ、またこの休暇を私以上にお楽しみくださることを祈りつつ、あわせて奥様にはくれぐれもよろしくお伝えくださいますようお願いしつつ、私こと、閣下のつねに変わらぬいとも恭順なるヨハン・セバスチャン・バッハ。」（４）

なんという虫のいい依頼であろうか。しかし、それは「出来損ないの息子」に対する深い愛情の現われであるともいえよう。誰もが「出来損ないの息子」に対してバッハと同じような関わり方をするとはかぎらないであろう。しかし、バッハはまぎれもなく、今しがたの引用にあったように、「出来損ないの息子」のために、なりふり構わず「虫のいい依頼」をするような父親であったのである。

さて、ここからは類推である。私は、教会カンタータ182番を作曲した頃のバッハの心を知りうるような手紙を見つけることができなかったが故に、ここではバッハの51歳の時の手紙を引用したのであるが、この手紙にあらわれていたようなバッハの家族に対する細やかな愛情に満ちた態度は、たぶん教会カンタータ182番を作曲した頃のバッハにもすでにあったはずだと考えるのである。そして、このような心の態度で生きる人間は、日常生活の時々刻々において悩み深いことであろうと思われるのである。このことに思いを致すことは、教会カン

タータ182番を考察する際に、きっと役立つに違いない。

1.3　教会カンタータ　182番

1.3.1　教会カンタータ　182番の成立年について

まず小林義武著『バッハとの対話―バッハ研究の最前線』に依ってこのカンタータがいつ作曲されたのかを探りたい。小林氏曰く、

「ヴィルヘルム・エルンスト公は、1714年3月に、セバスチャンを宮廷楽団楽師長に任命し、毎月一回のカンタータの作曲を任務として命じました。給与も250フローリンに昇給しました。こうしてセバスチャンは、初めてカンタータの創作を職務として行うことになりました。セバスチャンのヴァイマルでの職務が『宮廷オルガニスト兼室内楽師』であったことからも明らかなように、オルガンの演奏だけではなく、管弦楽の演奏も、セバスチャンの職務には最初から含まれていました。（略）当時は『カンタータ』と言えばイタリアの世俗的『室内カンタータ』のことでした。この『カンタータ』という名前を教会音楽に持ち込んだのは、牧師エルトマン・ノイマイスターでした。彼は『教会音楽に代わる宗教的カンタータ』（1704年）によってイタリア・オペラのマドリガル詩によるアリアと散文レチタティフを教会音楽に用いることを主張したのです。（略）セバスチャンはミュールハウゼンでは、ノイマイスター型のカンタータは作っていませんが、ヴァイマルでこのような新しいタイプの歌詞に作曲するようになります。ヴァイマルでのノイマイスター型の歌詞作者は、聖職会議書記、兼宮廷貨幣室長の、兼宮廷詩人であったザロモ・フランクでした。こうして1714年以後、セバスチャンの手から毎月1曲、全部で20曲ほどのカンタータが生まれることになります。ヴァイマルで成立したカンタータは番号順にＢＷV12, 18, 21, 31, 54, 61, 70a, 80a, 132, 147a, 152, 155, 161, 162, 163, 165, 172, 182, 185, 186a, 199です。ライプチヒ・カンタータに比べて、全体として室内楽曲で多様性に富み、みずみずしい情感にあふれているのが特徴です。」（5）

この引用からもわかるように教会カンタータ182番は、バッハのヴァイマールの宮廷オルガニスト兼室内楽師時代の作品である。このカンタータは「イタリア・オペラのマドリガル詩によるアリアと散文レチタティフを教会音楽に用いる」もので「ノイマイスター型のカンタータ」と呼ばれるものだったこともわかる。また、その歌詞の作詞者が「聖職会議書記、兼宮廷貨幣室長、兼宮廷詩人であったザロモ・フランク」であったこともわかる。そして、磯山雅氏によれば、この教会カンタータ182番は正確には1714年3月25日、すなわち棕櫚の主日のために作曲されたことがわかっている。（6）。

1.3.2　教会カンタータ　182番の歌詞の考察

このカンタータのタイトルは、一般に「BWV182 Himmelskönig, sei willkommen」とされている。ここでは原則として、礒山雅著の『バッハ・カンタータの森を歩む』所収の原文と対訳を用いることとしたい。まず表題については、「天の王よ、あなたをお迎えします」と訳されている。これでよいと思う。

このカンタータについてすでに引用した箇所でアルバート・シュヴァイツァーは次のように解説している。シュヴァイツァー曰く、

「バッハが1715年の棕櫚の日曜日と復活祭のためにそれぞれ書いた二つの作品には、春の陽光が輝いている。最初の『天の君よ、汝を迎えまつらん』（第百八十二番）の場合には、受難節に唯一のものとして許されていた限られた数の管弦楽だけで、バッハは作曲しなければならなかった。それで一本のフリュートと弦楽器だけしか用いていない。にもかかわらず彼は管弦楽導入部で、厳かさのリズムによって『天の君』の語句を音に浮き彫りする術を心得ていた。『天の君よ、汝を迎えまつらん』の語句の朗誦法（デクラマティオーン）に対しては、マテゾンといえども難癖をつけるべき何ものも見いだせないことであろう。バッハが二度用いている各声部の中断は非常に興味深い。ソプラノからバスにかけて四つの声部が次々に『迎えまつらん』〈willkommen ！〉とこだましてゆくように聞こえるのである。カンタータが先へ進行するに従って、受難の気分がいよいよあらわになってくる。テノール・アリア『イエスよ、幸いにも禍いにも汝とともに』は、痛みのモチーフによって伴奏される。」（7）

今しがたの引用にあったように、バッハはカンタータ182番を作曲するに当たり、「一本のフリュートと弦楽器だけしか用いていない」のであった。事実、歌詞の無い導入としての第一曲は一本のフルートで演奏されている。なお、先の引用でシュヴァイツアーは、このカンタータが1715年に作曲されたとしていたが、現代の研究の成果は磯山氏も言っているように1714年に作曲されたものであることを突きとめている。

さて、本稿で特に取り上げたいのは、シュヴァイツアーが「厳かさのリズムによって『天の君』の語句を音に浮き彫りする術を心得ていた」と説明していた第2曲の歌詞である。この部分は合唱で歌うように指示されている。対訳で示すと次のとおりである。

「Himmelskönig, sei willkommen,
（天の王よ あなたを迎えします）
Laß auch uns dein Zion sein!
（私たちをも、あなたのシオンとしてください）
Komm herein,
（お入りください）
Du hast uns das Herz genommen.
（あなたはもう、私たちの心を占めてしまわれました）」

磯山氏は別の書物においてこの第2曲について次のように解説しておられる。

「ＢＷＶ一八二は棕櫚の主日のためのカンタータである。この日のための福音書章句はマタイ福音書21章の１節－９節で、そこでは、受難をひかえたイエスがろばに乗ってエルサレムに入場したこと、それを群集が『ダビデの子、ホサナ』と叫びつつ迎えたことが語られる。詩人はこの出来事を念頭に置いてカンタータを書きはじめるわけであるが、冒頭の歌詞は次のようなものである。(歌詞を略す)。つまりここでは、イエスの入場を喜ぶエルサレムの人々が現在のわれわれに置きかえられ、町に入って来るという外面的な出来事が、心に入って来るという内面的な経験へと移されているのである。」(８)

この解説はまことにすっきりしたものであると同時に、この歌詞を作詞した詩人ザロモ・フランクの為さんとしたマタイ福音書21章の１節から９節までの章句についてのあざやかな寓意的解釈の本意をよく汲んでいると言えよう。

この第２曲とよく響きあう歌詞があるのは、第７曲である。この第７曲も第２曲と同じく合唱で歌うように指示されている。対訳は以下のとおりである。

「Jesu, deine Passion
イエスよ、あなたの受難は
Ist mir lauter Freude,
私には、純なる 喜び
Deine Wunden, Kron und Hohn
あなたの傷と冠、嘲りは
Meines Herzens Weide;
私の心の牧場
Meine Seel auf Rosen geht,
私の魂はばらの園へと向かう、
Wenn ich dran gedenke,
それを思いみるとき
In dem Himmel eine Stätt
天のひと隅を
Uns deswegen schenke.
それゆえ私たちにお与えください。」

この詩の中で、特に４行と５行が重要である。こうであった。

「Meines Herzens Weide(私の心の牧場); Meine Seel auf Rosen geht (私の魂はばらの園へと向かう),」。よって、心 (Herz) は魂 (Seel) につながってる。ここに至って、「イエス･キリストのエルサレム入場」は、信徒の心、さらには信徒の魂へのイエス・キリストの入場という事態に進んでいる。ここで決定的なのは、信徒の心がイエス・キリストで満たされねばならないという問題意識である。バッハにはその問題意識が明確であったのである。バッハにとってキリスト教信仰とは、それほどまでに切実な問題意識に裏打ちされたものであったのである。それは、バッハの前半生を考えれば頷けるのではないだろうか。バッハは９歳で母を失い、10歳で父を失っているのである。音楽で生業を立てるようになったのは15歳である。後年51歳になったバッハが「出来損ないの息子」のために苦悩した事実についてはすでに見たが、あのように情の深いバッハが、15歳で経済的に独立しなければならない境遇において、どれほど悩み苦しんだかは想像に難くなかろう。だからこそ、バッハはイエス・キリストに己が心、また魂に入っていただかなくてはならなかったに違いない。

この項の最後に、カンタータ182番の歌詞の作詞者ザロモ・フランクについて磯山氏の前掲書に依りつつ触れておきたい。

「ザーロモン・フランク（1659－1725）は、ワイマールに生まれイエーナ大学を出て、各地の宮廷の秘書官をつとめたあと、1701年にワイマールに戻って、教会監督会書記に就任、宮廷詩人のほか図書館の司書と古銭蒐集室の世話係りも兼務して、文化の華開こうとするワイマール宮廷の、重要人物の一人となった。」(９)

以上のことは、すでに「1.3.1　教会カンタータ　182番の成立年について」の項において引用した小林義武氏の文章でも少し紹介されていた。ただ磯山氏が紹介しておられる以下のエピソードは私には重要であった。

「ちなみにフランクは、その人生において、姉妹・若妻・三人の息子に先立たれるという苦しみを味わった。これが彼の魂にいやしがたい傷を残したと、研究家ホフマン＝エルブレヒトは言う。いわば、彼は、この世を涙の谷と観じるバロック詩人たちの世界観を、体験を通じて共有したわけである。」(10)

このようなことを知ると、バッハがザロモ・フランクの歌詞を特に愛したという事実も頷ける。バッハもまた人生の「涙の谷」を熟知していたのである。「涙の谷」を行く者の心には、魂には、どうしてもイエス・キリストが入ってくださらねばならなかったのである。

2　エックハルト

2.1　エックハルトについて

ここでは、宮谷宣史編『悪の意味―キリスト教の視点から』所収の拙論「マイスター・エックハルトにとっての悪」から、本稿において必要と思える部分を引用したい。

「〈一　エックハルトの生涯〉エックハルトの生涯について分かっていることは多くない。エックハルトは一二六〇年にチューリンゲン地方に生れ、少年期にエアフルトのドミニコ会修道院に入り、一二七七年にはドミニコ会から派遣されてパリ大学で自由学芸を学んでいる。一二七九年にはケルンのドミニコ会立神学大学で学んでいる。一二九三年から一二九四年にかけてエックハルトは、命題論集講師として、これもまたドミニコ会から派遣されて、二度目のパリ滞在を果たしている。その後、一三〇〇年にもパリ大学に派遣され、マギステルの

称号を受けている。以来、ヨハンネス・エックハルトはマイスター・エックハルトと呼ばれることとなるのである。これが、三度目のパリ滞在であり、一三〇二年にはパリ大学の正教授に任ぜられている。エックハルトの四度目のパリ滞在は一三一一年から一三年にかけてである。この時もエックハルトは神学教授としてドミニコ会から派遣されている。こうして、エックハルトのパリでの学問的な生活は、都合一〇年間に及んでいる。他方、大学で学んだり教えたりしていないときのエックハルトは、ドミニコ会の聖職者として要職についている。最初は、一二九四年から一二九八年までで、テュートニア管区の管区長代行兼エアフルト修道院の院長をつとめている。次は一三〇三年から一三一一年までで、サクソニア管区長をつとめている。三度目は一三一六年から一三二二年までで、ドミニコ会総長代行としてシュトラースブルクに滞在している。そして、最後は一三二三年から没年までで、ケルンのドミニコ会立神学大学の学頭をつとめる傍ら、ドミニコ会修道院院長でもあった。以上の如きエックハルトの生涯をわれわれは、悪の問題との関係で敢えて二つに分けて考えたい。すなわち、シュトラースブルク以前と、シュトラースブルク以後とである。それは、ちょうどエックハルトが中世高地ドイツ語で説教を始めた時期を境としている。

〈二　シュトラースブルク以前とシュトラースブルク以後〉シュトラースブルク以前のエックハルトの人生は、栄光に彩られていたと言えよう。パリ大学における学生生活と、その後の二度の教授職を含む約一〇年間は、学問の厳しさはあったであろうが、周囲の悪意を如実に感じるという日々でなかったであろう。しかし、シュトラースブルク以後は、事情が一変したことであろう。この時期からエックハルトの説教は中世高地ドイツ語で為されるのである。それはラテン語を理解できない庶民に説教するためであった。その庶民の中に、当時異端視さえされていたベギンがいたのである。このベギンとの関わりは、エックハルトを異端審問という悪意の直中に追い込むことになる。ヴィエンヌ教会会議の決定は、既にベギン迫害に根拠を与えていた。ベギンに関わった聖職者は糾弾されていたのである。エックハルトももちろん例外ではなかった。エックハルトがシュトラースブルクに姿を現すのはヴィエンヌ教会会議後数年経った一三一四年である。」(11)

以上のうち、本稿において特に重要なのは後半の部分に出てきたベギンと呼ばれた疑似修道女達とエックハルトの出会いである。彼女達は、貴族の娘しか修道院に入れなかった当時において、貴族の娘に生まれなかったが故に、世俗の直中での修道生活を目指してベギンを形成したのであった。その結果、当時ライン川沿いの諸都市で織物業の世界にも進出して、男性の同業者組合であったツンフトからもその存在を問題視され、遂に異端の嫌疑をかけられもしたのである。そのベギンと、エックハルトは説教活動を通して深くかかわったのである。

2.2　ベギンについて

ここでは、ベギンについてもう少し詳しく述べておきたい。これも、かつての拙論から引用したい。

「ベギンは、修道院におけるような終生の誓願を立てない。それ故に、ベギンは出入り自由であった。結婚して館を出ていくものもあれば、生別、死別のいずれであれ、一人になったら帰ってくることもできた。そのようにベギンの共同体は複雑な組織も特別に厳格な規則も持たず、強いて言うなら、独身と簡素な生活がほとんどの場合の不文律であった。また、ベギンは、館の中だけに留まらず、外に出て営利活動もおこなった。(略) ケルンにはエックハルト当時、1320年に2,000人のベギンが存在したと言われている。この数は、当時のケルンの人口約40,000人からみて、決して少なくない。」(12)

このようにベギン達が異端の嫌疑をかけられていたのである。教皇庁は、パリ大学教授であり、またドミニコ会の名説教者として誉れの高かったエックハルトに、異端にかかわっていると思われるベギンたちを正統信仰に呼び戻すという任務を託したのである。しかし、エックハルトはむしろベギン達の実存と深くかかわり、むしろ彼女たちの信仰から学んだと思える節さえある。その結果、エックハルトは異端審問にかけられたのである。

2.3　エックハルトのドイツ語説教第2番

ここでは、バッハの教会カンタータ182番の歌詞との関係で注目に値すると思われるエックハルトの言葉を、エックハルトのドイツ語説教第2番から取り上げたい。当該の箇所を上田閑照氏の訳で引用したい。ルカによる福音書10章38節の「一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた」という一文をテキストにした説教第2番の冒頭において、エックハルト曰く、

「今、福音書の言葉をまずラテン語で読んだが、それはドイツ語に直せば次のようになる。『私たちの主イエス・キリスト、或る城に (in ein bürgelin) 入り給えば、女なる一人の処女 (おとめ) に迎え容れられる (enpfangen von einer juncvrouwen,diu ein wip was)』。以上で私はイエスが迎え容れられ給うたということを説いた。しかし、『城』とは何かについてはまだ話していない。それについてこれから語りたいと思う。私はこれまでしばしば、霊の内に、或る一つの力がある、それのみが自由であるような一つの力があると言ってきた。或ときはそれを霊の護りと言い、或るときはそれを火花 (vünkelin) と言ってきた。今日はしかし私は次のように言いたい。すなわち、それは『これでもなくあれでもない』、しかも『一つの或るもの』(ein waz) であって、それは天が地を高く超えているように、これとかあれとかを高く超えていると。それゆえ、今や私はそれを、今

まで名づけてきたよりもいっそう高貴な仕方で名づけたいのである。しかも、それ自身はその高貴さをもあらゆる仕方を寄せ付けず、はるかに高く超えている。（略）私が上に述べたあの力、すなわち、そのうちで神が全神性をもって青々と繁り花咲きつつある力、まさにこの力のうちで御父が、ご自身の内においてと同じく、真実にその独り子を生み給い――なぜならば、御父はこの力のうちに真に生きてい給うているがゆえに――、そして同時に、霊も御父と共にその同じ独り子を生みつつ、自分自身をその同じ子として生み、このようにして、霊はこの光のうちで神のその同じ独り子であり真理であるのである。（略）さあ、よく注意してほしい。私が語り、私が思っているところの『魂の内なるこの城』（diz bürgelin in der sele）はまことに一にして単純であり一切のあり方を高く超えているので、さきほど語ったあの高貴なる力さえ、ただの一度でも一瞬たりともこの城の内を窺い見るに値しないほどである。（略）私たちがこのようにして一つの、すなわち一なる『城』であり、私が説いてきたような仕方でイエスがそこに登り、迎え容れられ、そして私たちの内に永遠に留まり給うように、神が私たちを援け給わんことを！　アーメン」(13)

エックハルトは、このテキストにおけるイエスが訪れた村を「bürgelin」と訳している。しかし、この言葉は原語のギリシャ語では「κώμη ν」であり、現代の日本語訳聖書が正しく訳しているように「村」としか訳せない言葉である。何故なら、「κώμη ν」という言葉は、城壁で囲まれたポリス（＝都市）に対して城壁に囲まれていないものという意味で用いられているのだからである。ではなぜエックハルトは「bürgelin（＝小さな城）」と訳したのであろうか。それは勿論、当時の教会が西方四大教父の一人であるヒエロニモスの訳したヴルガタ聖書を用いていたからに違いない。ヴルガタ聖書には確かに件の言葉は「castellum（＝城、とりで、かくれ場所など）」と訳されているのであり、そのドイツ語訳としてはエックハルトが訳しているように「bürgelin」が適訳である。現代のドイツ語訳聖書は日本語訳聖書がそうであるように、ギリシャ語の原語から正しく「Dorf」と訳している。しかし、あえて私は言いたいのであるが、エックハルトにとってはどうしてもこの言葉は「bürgelin」と訳すことのできる「castellum」でなければならなかったのである。何故ならドイツ語説教第２番の生命は、ひとえに「城」という言葉にかかっているからである。すなわちこの説教において「城」は私たちの心の隠喩である。この隠喩が極めて効果的なのは「城」だからである。周りを城壁に囲まれた「小さい城」は、私たちの「風にもおののきがちなか弱い心」の隠喩としてまことにふさわしい。城壁に囲まれていない「村（κώμη ν）」は、私たちの「心」の隠喩としては効果的でない。よって、「小さな城」である私たちの心に「イエス・キリストを迎えいれよ」という促しが、この説教の決定的なメッセージである。それは、この説教における祝祷とも思える最後の言葉にも明白に示されていた。エックハルトはこう祈っていた、「私たちがこのようにして一つの、すなわち一なる『城』であり、私が説いてきたような仕方でイエスがそこに登り、迎え容れられ、そして私たちの内に永遠に留まり給うように、神が私たちを援け給わんことを！　アーメン」。

こうして、自ずから、エックハルトの説教は、「信徒の心へのイエス・キリストの入場」という事態を信徒をして親身に理解することを促進していると言えよう。

結び　バッハとエックハルトにおける神秘主義との関係

見てきたように、バッハは、その人生の極みで魂に入場したまうイエス・キリストにすがりついていた。バッハは厳しい環境で育つ中で、イエス・キリストを迎え入れるような「心」を養われていたに違いない。故にこそ、バッハとは育った環境は違っても、「涙の谷を歩く」ような体験の中からカンタータの歌詞を紡ぎだしたザロモ・フランクの心をよく理解して教会カンタータ182番を作曲したのであろう。因みに、フランクは『福音主義礼拝の捧げもの』と題されるカンタータの台本集を出版しているが、バッハはその中の10編に作曲しているという（14）。それほどに、フランクはバッハが特に愛したカンタータ作詞者だったのである。

他方、エックハルトは、悩みの直中におけるベギンたちと歩みを共にする中で、「悩める者の心なる城」に入り給うイエス･キリストを発見したのではないだろうか。それは正に生活の直中における神との神秘的合一を内実とする神秘主義であったと言えよう。

以上、教会カンタータ182番に見られるバッハの信仰の源流は、エックハルトの生活の直中における神秘的合一を内実とする神秘主義にも見ることができるというのが本稿の結論である。

註

1　ポール・デュ＝ブーシェ著『バッハ：神はわが王なり』、創元社。
　D･アーノルド著『バッハ』（コンパクト評伝シリーズ；4）、教文館
2　資料③『バッハ叢書；第10巻（原典資料でたどるバッハの生涯と作品）』ハンス＝ヨーアヒム・シュルツェ編、白水社、24頁
3　同上、25頁
4　同上、25頁
5　小林義武著『バッハとの対話―バッハ研究の最前線』、小学館、2002、110頁
6　礒山雅著『バッハ・カンタータの森を歩む』、東京書籍、2004、87頁
7　『シュヴァイツァー著作集』第13巻（バッハ　中巻）. 白水

社、1958、327頁
8　礒山雅著『バッハ＝魂のエヴァンゲリスト』、講談社、2010、93頁－94頁
9　同上、98頁－99頁
10　同上、講談社、2010、102頁
11　宮谷宣史編『悪の意味―キリスト教の視点から』、新教出版社 , 2004、213頁－214頁
12　宮谷宣史編『性の意味―キリスト教の視点から』、新教出版社、1999、183頁－184頁
13　マイスター・エックハルト著 ; 上田閑照訳『ドイツ語説教集』(ドイツ神秘主義叢書)、創文社、21頁－22頁。
14　礒山雅著『バッハ・カンタータの森を歩む』、東京書籍、2004、88頁。